

中学校国語科用新教科書の〔言語事項〕に関する記述の問題点

武 山 隆 昭

はじめに

平成元年三月十五日、十二年ぶりに改訂された「中学校学習指導要領」が、平成五年四月一日から実施された。全国一斉に新指導要領準拠の教科書が使用され始めたのである。

教科書は、正式には『教科書の発行に関する臨時措置法』（最新改正、昭四五―法四八）第二条に「この法律において、『教科書』とは、小学校、中学校、高等学校及びこれらに準ずる学校において、教科課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であつて、文部大臣の検定を経たもの又は文部省が著作の名義を有するものをいう。」と定義づけられている。そして、『学校教育法』（最新改正、昭六三―法八八）第二十一条に「小学校においては、文部大臣の検定を経た教科書用図書又は文部省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない。」と規定されており、第四〇条で中学校にも準用すると示されている。教科

書を全く使用せずに授業を行つて処分された先生に対する福岡地裁の判例にみるように、教育の現場において教科書使用は義務づけられているのである。「教科書を教えるのではなくて、教科書で教えるのだ」とは言うものの、教科書の占めるウエイトは相当に重いと言わねばならない。それゆえに、教科書の著者ならびに出版社は良い教科書を作る責務がある。特に、高等学校用（「国語Ⅰ」では十三社二十六種）と比べて寡占化が進んでいる中学校用（五社五種）においては責任がより重いと言えよう。

さて、『義務教育諸学校教科用図書検定基準』（平成元年四月四日文部省告示第四三号）によると、各教科共通の条件として、「当該学習指導要領に示す事項を不足なく取り上げていること」を真つ先に挙げ、「学習指導要領に照らして不必要なものは取り上げていないこと」を次に挙げている。すなわち教科書作りは、学習指導要領（以下指導要領という）という釈迦の掌の上で各社の創意工夫を競うにすぎない、とも言える。しかし、その掌はかなり広く大きいので工夫のし甲斐はあるのである。

国語科教育の目的には、言語教育と人間教育という二つの側面がある。「表現」「理解」の能力を高めるために、その基礎として「言語事項」に関する知識を効率よく授け、身につけさせることが肝要である。指導要領によると、「言語事項」は「A表現」及び「B理解」の指導を通して身に付けさせるとともに、国語の特質を理解させるために、ある程度まとまった知識を得させる指導もできるように配慮すること、と示されており、これは体系的な指導の必要性を示唆したものと考えられる。文法や語彙や文字や音韻等の記述が、どのように体系的に記述されているかを中心に各教科書を比較検討することにした。また、生徒が言葉に関心を持ち、国語に興味を持つように促す創意工夫のあとも見てみたい。

○ 考察の対象と方法

現在中学校で使用されている国語科の教科書は、次の五種類である。(一)は略称である。

東京書籍	『新しい国語』	[701 801 901]	……………	(東書)
学校図書	『中学校国語』	[702 802 902]	……………	(学図)
三省堂	『現代の国語』	[703 803 903]	……………	(三省)
教育出版	『新版中学国語』	[704 804 904]	……………	(教出)
光村図書	『国語』	[705 805 905]	……………	(光村)

右記五社の平成五年度使用版を対象とし、学習指導要領の〔言語事項〕に示された諸項目に関するそれぞれの教科書の記述を比較検討し、問題点を指摘する。その場合、略称による実名で述べるが、特定の教科書の欠点探しをしたり、優劣を決めたりすることが目的ではなく、日本の国語科教科書がもっと良くなるようにとの願いを込めて、公正に叙述する所存であることをこわっておく。

採り上げる項目は、音声・音韻、文字、語彙、文法、その他の言語事項一般と大別し、それぞれ細分して項目を設けた。細分小項目は一般的な国語概説書を参考にして私に設定した。次章以降に掲げる各表の数値は、その項目に各教科書(学年別)が何行・何頁あてているかを示している。すなわち、どの教科書がどの分野に力を注いでいるかを、量的に比較するための手段とした。教科書を見ると、教材の文章の後ろに【学習のてびき】とか【学習の課題】といった名称の設問が置かれている。この設問には、読解、鑑賞、表現などさまざまな分野が含まれているが、〔言語事項〕

に関する問いも多く設定されている。これらの設問を細分小項目にあてはめ、その項目に当たる設問が何問あり、何行使っているかをそれぞれ数値で示した。各表の上段「設問の部」の数値は、二段組みの設問文章が合計何行で記述されているかを表わしたものである。下の()内は設問数である。「朗読し暗唱せよ」のような設問は行数を二分して両方の項目に入れた」

表の下段「説明文の部」は、単元と単元の境目や教材文章の後ろに、「漢字の学習室」「ことばのしおり」「文法の窓」等の名称で掲載されている「言語事項」に関する内容の説明文を、細分小項目にあてはめて、頁数で示したものである。巻末にまとめて文字や語彙について説明してあるものも、内容別に小項目に当てはめ頁数に換算して加えた。ただし、巻末の文法事項に関するものは、小項目に分けることが困難な叙述が多いため、表Ⅳの最下段に綴じ込みの活用表とともに一括の頁数を示した。

この表により、どの教科書がどの項目に多くの行・頁を与えているか(多ければそれだけ重視していることになる)を量的に比較することができる。しかし、質的な比較は不可能なので、教科書の記述内容を読んだの稿者の見解を述べて比較検討を加えることとする。表Ⅵは、言語に関する署名入りの読み物の一覧表である。表Ⅶに巻末付録の「言語事項」に関わる分のみ示した。

一 音声と音韻

「聞くこと」「話すこと」に関する指導要領の記述は、昭和五十二年版では「カ 話し言葉と書き言葉、……などについて理解し……」とある他何もないといった状況であった。これに対して、平成元年版では「ア 話す速度や音量、

表Ⅰ 音声と音韻（説問の部は行数、説明文の部は頁数）

項 目	出 版 社			東 書			学 園			三 省			教 出			光 村		
	学 年			1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
設 問 の 部	音節(清音・直音など)																	
	語音変化(転倒など)																	
	連濁・連声																	
	アクセント・イントネーション																	
	朗 読			18 (7)	6 (2)	12 (5)	7 (3)	4 (2)	9 (6)	10 (5)	12 (6)		10 (5)	5 (3)	1 (1)	12 (4)	15 (2)	5 (1)
説 明 文 の 部	暗 唱						1 (1)	6 (3)			2 (1)		1 (1)			5 (1)		
	ス ピ ー チ			6 (1)														
	音 節				3			2.5				2.5						
	語音変化(同化など)																	
	連濁・連声																	
説 明 文 の 部	アクセント・イントネーション			0.5						1		2						
	ス ピ ー チ						4		1			4		3	2			
	話し言葉の特徴								1	1								
	話し合い(ディベート)								1		1	4	3	3	2	3	7.5	
	日本語の美しい響き									2	1							

言葉の使い方などに注意すること」「カ 話し言葉と書き言葉について理解すること」（以上第一学年）「ア 言葉の調子や間のとり方などに注意すること」（第二学年）とあるほか、「A表現」の領域でも「朗読」「話し合い」「言葉遣い」などについて記述してあって、音声言語の面にも意を用いていることがわかる。特に、「第3指導計画の作成と内容の取扱い」の1(3)は、今までに見られなかった記述である。

指導要領のこうした変化を承けて、教科書もまた変化した。稿者が以前、昭和六十年年度使用版の五社の教科書を対象として調査した時^{〔注〕}には、光村以外ほとんど音声言語の分野に記述がなかった。ところが、今回は表Ⅰに示すように、朗読・暗唱の面をはじめとして、説明文の形でかなり強化されている。しかし、出版社による差違もめだつし、必要と思われる項目の欠如もあるので、具体的に問題点を指摘しながら述べていく。

設問の部では、「声に出して読んでみましょう」「作者の気持ちを想像しながら、朗読しましょう」「原文を繰り返し朗読して、文章のリズムを感じ取ろう」といった、「朗読」と、

「好きな段落を選んで、暗唱してみよう」「好きな連を暗唱してみよう」などの「暗唱」のほか、東書一年二六頁「次の中から一つを選んで、みんなの前で話してみよう」（表Ⅰではスピーチに分類）として四つのテーマを掲げている。音声・音韻に関する日本語の特質は、文学的文章や説明的文章の後に掲げる課題としては設定しにくいからであらうか、全くみることができなかつた。^{（注2）}

これに対して、説明文の部では「話し言葉の特徴」「朗読」「スピーチ」「話し合いの進め方」といった「A表現」の方に近接した項目のほかに、「言語事項」としての音声・音韻に関する解説文が掲載されている。

まず、東書二年二二八頁「日本語の音節」は、短歌の三十一^{みそひと}文字は言い方を換えれば三十一の音節からなるということだと説き始め、五十音図を示して清音・濁音・半濁音・促音・撥音・拗音の合計百二種類の音節があることを述べる。続いて、シェパードなど外来語の音を加えても約百三十種の音節で、諸外国語と比べ極端に少なく、これらを組み合わせて日本語を言い分け、聞き分けており、音節は子音+母音という組み合わせ（開音節）からなっている、音節を表す仮名文字は日本語に即した便利な文字である、等が述べられている。同様に日本語の音節についての基本的な説明文を載せているのは、三省一年三三頁と教出一年二三〇頁で、ともに二頁半を当てている。

音節に関する知識は、日本語を学ぶ出発点とも言える基礎事項であるだけに、ぜひ他の二社も次の改訂時に考慮願いたい。特に「五十音図」は、文法項目で用言の活用を説明する場合必須知識であるのに、学図は全く掲載していない。（光村は一年二三四頁に谷川俊太郎の五十音図という文章を、音節の説明のためではなく、言葉遊びの一環として載せている。）さらに、母音三角図は同化や交替といった音韻変化を説明するのに必須知識である。

ここで一つ叙述の問題点を指摘しておきたい。前述の東書二年二三〇頁に「日本語の各音節は、……koというように、子音+母音という組み合わせになっています。……撥音・促音以外はみな同じです。『ア・イ・ウ・エ・オ』を

はじめ日本語の音節は、母音で終わっていることが分かります。このような、母音で終わる音節を開音節といいます。」という叙述がある。生徒から「ア・イ・ウ・エ・オ は、子音＋母音という組み合わせになっておりませんが」という質問が出そうである。教授資料を見ていないのでわからないが、稿者は指導の先生に「a（・）は子音フォネーム「ゼロ」を有する記号」という考え方で説明してくださるよう教授資料に書いておいた方がよいと思う。教科書の叙述を訂正するほどでもなからう。

次に、連濁・連声についての説明文が掲載されているのは教出だけで、三年二四七頁「漢字の広場4『呼応』は「オウ」で『反応』は「ノウ」という題の説明文である。「穏」は「安」と結びついて「アンノン」と読み、「鼻＋血」で「はなぢ」となるように、「常用漢字表」に示されている音訓とは多少違った読み方になると述べている。教師が「連声・連濁」について説明するよいきっかけを与えてくれるコラムである。他四社は全く触れていない。

第三番目として「アクセント・イントネーション・プロミネンス」について見てみよう。三省二年二〇頁「ことばのしおり 1」で、橋と箸のアクセントの地域的違いを日本地図で示した後、普通の言い方をする時は末尾の音程を下げて発音するが、しり上りに言うときと尋ねる文になってしまう、これがイントネーションである旨の説明し、プロミネンスとは強調的にある部分を強く発音すること云々と述べている。簡単な説明であるが、教師が例を多く示してやれば生徒は理解できるであろう。教出一年二三二頁はアクセントについてのみの記述であるが、箸と橋と端の違い（助詞「が」をつけた形）まで述べている。三音節語、四音節語へ広げ、共通語のアクセントの型が音節数＋1であることを教えるという発展性を含んだ叙述である。光村一年七四頁「言葉の窓」は「コンピュータに文章を音読させる」（表V）という興味深い読み物で、文節の区切りに合わせアクセントとイントネーションに触れている。東書一年四〇頁は、話し言葉の特徴の一つとして簡単に触れているだけである。

以上のことから言えることは、改善されつつあるものの、依然として音声の分野に関する叙述は軽視されているということである。人間の言葉の歴史から言っても音声言語が基本なのであるから、もっと多くの事柄を提示してほしい。たとえば、フィエトルの三角形を示してお隣同士で母音の交替や同化が行われ言葉が変化していくこと、脱落や転倒による言葉の変化についても触れれば、生徒はもっと言葉に興味を持つのではなからうか。文法で教えることとなる撥音便や促音便も母音の脱落現象なのであるから、ぜひ低学年で掲出して欲しい。

二 文 字

指導要領の〔言語事項〕(2)に、「漢字に関する次の事項について指導する」として、学年ごとに指導するべき字数は示されているが、文字の種類や歴史や漢字の特質などについては指導要領に全く触れられていない。そこで、各教科書の工夫が見物である。私に設定した項目別に見ていく。(表Ⅱ参照)

(一) 文字の三要素「形・音・義」

この項目に触れている教科書は一社もない。文字の性質を知る上での基礎知識であるのに。

(二) 世界の文字と文字の種類

学図三年二四六頁「文字の学習」は、「文字の歴史」の項目を立て、シュメル文字やヒエログリフを紹介した後、漢字が紀元前一三〇〇年ごろの殷代の甲骨文字までさかのぼることができることと述べ、表意文字であることを指摘する。続いて、表音文字である仮名やローマ字の他アラビア数字などを用いることも述べて、三頁半費やしている。他四社は記述なし。

表II 文字

		出版学 社 年			東 書			学 図			三 省			教 出			光 村		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3			
設 問 の 部 (数 値 は 行 数 、 カ ッ コ 内 は 設 問 数)	六 書				11 (2)	4 (1)	2 (1)												
	形成文字の構成							10 (2)					8 (1)	11 (2)					
	部首(偏・旁)・画数				12 (2)	20 (3)	17 (3)	12 (2)			35 (3)			21 (2)	34 (4)				
	漢字の音と訓(含重箱読)				16 (3)			5 (1)		26 (2)	5 (1)				20 (2)	29 (2)			
	呉音・漢音・唐音	10 (2)				3 (1)				16 (1)									
	訓(含熟字訓)		6 (1)			3 (1)	23 (4)	10 (1)					11 (2)			10 (1)			
	読みにくい漢字							10 (1)											
	漢字の読み方調べ							28 (3)	2 (1)	15 (3)		17 (2)		6 (1)	16 (1)	40 (2)			
	同音(訓)異字	6 (1)			4 (1)	4 (1)	19 (2)	21 (4)	39 (6)	40 (7)	21 (3)	17 (2)		16 (1)	46 (4)	68 (4)			
	同字異訓(音)		5 (1)								6 (1)					15 (1)			
	多義的な漢字												6 (1)						
	共通する部首の漢字															8 (1)	9 (1)		
	字形の似た漢字				6 (1)		5 (1)		30 (4)	8 (1)									
	漢字の書き取り											8 (1)							
	筆 順																		
	対立する意味を持つ漢字	5 (1)																	
説 明 文 の 部 (数 値 は ベ ー ジ 数)	文字のいろいろ				1		3.5	1.5											
	漢字の歴史				1														
	六 書	3			4.5	0.5	1.8	1.5				1			0.7				
	形成文字の構成			1															
	部首(偏・旁など)	3	4		2			1			1								
	漢字の画数、筆順	1							1.3										
	漢字の音と訓(含重箱読)	1	3		1.5	1	1.8				1	1							
	熟字訓・戯訓		0.7	1				1					1		0.5				
	同音(訓)異字		1									2			0.5				
	漢字の多義性												1						
	字形の似た漢字	1		0.5									1						
	仮名の成り立ち		0.3				0.7												
	漢字・仮名の使い分け				1.5	1.5	0.5												
	仮名遣いと送り仮名						0.5												
	漢字の用いられ方による分類						2												
	楷書・行書・草書						1.5												
明朝・ゴシック・教科書体											1								
常用漢字について																2			

(三) 漢字の歴史

前項と同じ学図一年二四四頁「文字の学習」で「漢字 歴史と伝来」という項目を立て、甲骨文字、金文、篆書、隸書、楷書といった字形の展開を説明している。東書一年二二七頁に甲骨文字のことがあるほか他社に記述なし。

(四) 漢字の成り立ち (六書)

さすがに六書については、五社ともに何らかの叙述をしている。一年生で三頁にわたり「漢字の生い立ち」としてかなり詳しく説明しているのが東書で、学図一年も巻末の「言語の学習」単元の「文字の学習」で前項で取り上げた「歴史と伝来」に引き続き「漢字の成り立ち」という項立てをして、六書について四頁半(内半頁は国字について)を使っている。それを利用する形で八四頁「漢字の学習室」では、品・辛・克などの漢字を挙げそれぞれ象形・指示・会意・形声のどれかを調べようという問を設けている。二、三年においても一つずつ設問が用意しており、六書に関しては学図が一番力を入れている。教出のみ二年になってから学ぶことになる。

(五) 漢字の仕組み

いわゆる偏旁冠脚繞垂構と部首の名称についてをこの項にまとめる。

学図一年一五四頁「漢字の学習室」では、「冠の例 竹(たけかんむり)の漢字 筒(トウ・つつ)……水筒 符(フ)……符号」といった叙述で要領よく一頁にまとめている(二四九頁で補充している)。東書一年一二八頁「漢字の仕組み」は二頁使って画数にも及んだ説明をしている。三省一年二二〇頁「漢字のしくみ」は、設問形式で部首を学ぶように配慮した一ページであるが、よほど指導者が気をつけないと断片的な知識で終ってしまいそうである。他二社は触れていない。

この項目に関連した興味深い企画は、東書一年二四〇頁「漢字のなぞかけ」である。京都龍安寺にある蹲(教科書

には手水鉢ちようすざばちとある)の『吾唯足知』を持ち出して、共通の部首を持った漢字に興味を持たせるよう工夫してある。

(六) 漢字の音と訓

漢字に音読みと訓読みとがあり、音には呉音・漢音・唐音・慣用音があるという基本的な説明をきちんとしているのは、東書二年七二―七四頁と字図一年二五〇―二五一頁(二年一五八頁)と、教出一年二〇五頁十二年二二一頁である。教出は、一年で漢字の読み方に音と訓のあることを述べ(重箱・湯桶読みにも触れている)、二年で字音にも歴史があるとして呉・漢・唐・慣用音の説明をしている。学年を分けることは是非は議論の分かれるところであろう。熟字訓については、各社とも取り上げている。戯訓は、東書三年一二二頁に『万葉集』で「くく」と読ませることを例に引いて説明しているのみである。

(七) 字形のよく似た漢字

教出三年一四一頁「漢字の広場2」は、「粉」と「紛」「穫」と「獲」のように字形が似ていても同じ音をもっている漢字や、「料」と「料」のように音の違う漢字のあることなどを述べて、まちがえないように注意を喚起する説明文である。三省二年八八頁「形の似ている漢字」は、設問形式で「(一)次に示す各組の熟語を、一線の漢字に注意して読みなさい、として、1 遂行 駆逐 4 悲哀 盛衰 折衷 喪中 などを挙げている。(別の質問形式の二、三もある)この項については光村以外の四社はそれぞれ工夫していい。

(八) 同音(訓) 異字の使い分け

例えば、光村二年二四三頁は設問形式で、「(1)全員に注意をカンキする。(換気・喚起)、(10)摩擦によってイジヨウな熱を生じる。(異状・異常)、(2)走ったので、のどがカワいた。(渴・乾)」といった二十の問題を解きながら学習するように工夫してある。表には語彙の項に入れるべきかとも思われる熟語の読み方を問うものを含めてある。

(九) 同字異訓(音)、漢字の多義性

東書二年一二頁「言葉の学習」の1は「潜む」「潜る」のように、読み方によって違う意を表す漢字があります。次の1-6について、訓読みとその意味を調べてみましょう。1 細 2 頼 3 直 4 通 5 明 6 弾」という設問形式で同字異訓を学習させることをねらいとしている。教出一年一六六頁は「役(ヤク・エキ) 拾(シユウ・ジュウ)」などの異音とそれらを用いた熟語を挙げさせる問い、光村二年一八四頁3も同様である。

多義の漢字については、教出三年二二頁に、「機」に七通りの意味があることを一頁使って説明しているのが唯一である。この項目には他社も意を用いてよいと思われる。

(十) 読みにくい漢字の読み方

三省一年二八四頁「漢字の学習」に、「山門の仁王、一石は約一八〇リットル、体裁を気にしない」などを読ませる設問がある。いわゆる読みくせなのであるが、日常生活に密着した語については、いずれかの学年で整理した形での掲出してほしい項目である。

次に文字に関する叙述で今後改善して欲しい点を挙げておきたい。

まず第一に、日本の文字として特徴的な仮名文字の由来(成り立ち)についてきちとした説明が欲しい。わずかに東書三年一九四頁に二段組み九行分、学図三年二四八頁二段組み十一行分+図版、三省一年三五頁に二段組み十行分、の三書だけがほんの少し触れているだけである。『枕草子』や『徒然草』など仮名文学の一節を掲載し、読ませているのであるから、万葉仮名と平仮名・片仮名の知識は中学生にも必要であると思う。

第二に、表記の問題であるが、漢字仮名交じり文が日本語の一般的表記であること、漢字と仮名の使い分けの原則、カタカナで表記すべき語については、すべての教科書で採り上げて欲しい。現状では学図が全学年にわたって触れて

いるのみである。

第三に、常用漢字の性格について触れてほしいということである。制限色規範色の強かった当用漢字（二八五〇字）から、基準としての常用漢字（一九四五字）が昭和五十六年十月に内閣告示をもって公布されたことの意味や字体表・音訓表、送り仮名の付け方、現代仮名づかいなど、戦後の国語政策の流れについても一通りの知識は持っているべきだと考えている。その上で、人名用漢字や表外漢字（字体に注意させる）についても発展的に触れるようにしたい。巻末録に常用漢字一覧表を載せるだけでは不十分である。光村三年が巻末に解説文を載せているのみである。

三 語 彙

昭和五十二年版指導要領で、エ・カと二項目使って語彙指導を強化した流れは、今回の改訂でも継承されている。学年ごとにグレードアップさせながら、辞書的な意味と文脈上の意味、慣用句や類義語の意味の違い、抽象的な概念などを表す語句、同音異義語や多義的な意味を表す語句、語感を磨き語彙を豊かにする、といった多くのことを記している。これらの要求に対して、各教科書はどう対処しているのだろうか。同じく私に立てた項目別に見て行こうと思う。（表Ⅲ参照）

（一）単語には決まった語形と意味がある。

教出一年九一頁〔言葉の研究室①〕「言葉の音と意味」の冒頭で、「単語はそれぞれ一定の音と意味をもっています。」と記し、例えば「鳥」という単語は「ト」「リ」という音がこの順序で並んでおり、「つばさ」をもち、……「動物」といった意味を有すると説明している。これが言わば語の定義であり、語彙指導の出発点である。ところが、残念ながら他の

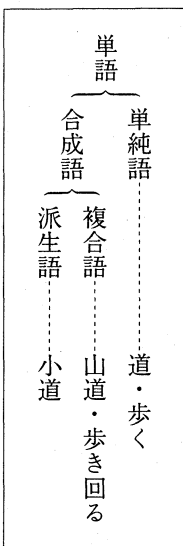
表Ⅲ 語彙

出版学 社 年		東 書			学 図			三 省			教 出			光 村		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
設 問 の 部 (数 値 は 行 数 、 カ ッ コ 内 は 設 問 数)	単語の種類(単純語・合成語 etc.)															
	複合語の構成			6 (1)		4 (1)		6 (1)	3 (1)			6 (1)		16 (3)	5 (1)	27 (3)
	熟語の完成(漢字)		15 (2)	4 (1)		6 (1)	16 (3)	8 (2)	23 (2)	10 (2)	29 (2)	19 (2)	8 (1)	28 (3)	62 (5)	
	熟語の完成(漢字三字以上)						6 (1)		4 (1)	49 (9)		7 (1)	27 (3)	4 (1)		15 (1)
	類義語・対義語		9 (2)	2 (1)	2 (1)	2 (1)		12 (3)	20 (5)	18 (4)					11 (2)	26 (4)
	類義語の意味の違い				9 (2)	3 (1)										4 (1)
	多義語の文脈上の意味							25 (3)	33 (3)	26 (3)					10 (2)	
	意味の広がり(派生的意味)					4 (1)										
	接頭語・接尾語		4 (1)					2 (1)	5 (1)			7 (1)		7 (1)	6 (1)	
	品詞の転成												8 (1)			
	漢語⇄和語 漢語⇄外来語(言い替え)		7 (1)	7 (1)		3 (1)	5 (1)									
	慣用句・成語・諺	7 (2)	14 (2)	9 (2)	3 (1)	3 (1)	4 (1)	10 (2)	10 (3)		4 (1)	8 (1)	10 (2)	7 (1)	6 (1)	
	擬声語・擬態語				3 (1)									6 (1)	8 (1)	
	略語(もとの形調べ)		5 (1)													
	序数詞(物の数え方)		5 (1)													
	連想する言葉(イメージマップ)				5 (1)											
	昔と今の言葉の違い					6 (1)									10 (1)	
音や色を表す言葉			2 (1)													
人を表す言葉		2 (1)											7 (1)			
月の異名			9 (1)													
指定語句を用いた短文作り				6 (2)	2 (1)	8 (2)	15 (4)	10 (4)	3 (1)	4 (2)					7 (1)	
語句の意味を説明する	5 (1)	7 (1)		6 (2)	1 (1)		5 (1)	8 (1)	4 (1)		6 (1)		4 (1)	4 (1)	27 (3)	
意味を変えず別の表現に				6 (1)	7 (2)	6 (1)	12 (1)						14 (2)	15 (2)	8 (1)	
音読み訓読みで意味の違う熟語					3 (1)								7 (1)			
上位語・下位語							8 (1)									
設 問 の 部 (数 値 は ペ ー ジ 数)	単語の種類(単純語・合成語 etc.)			1.5	1.5	2.5	3	4								
	語 構 成			1.5	1.5	2	1.3		1			3.5				3
	語の意味(辞書的・文脈上)				2.5	1.3	1	2			2					
	類義語・対義語	2.5			0.5	3	1.5		2.5		1	4			2	
	多義語(意味の派生)		0.4	1	0.5	1				3	0.5		1		1	
	同音異義語		0.7	0.5	1						0.5		1		3	
	和語・漢語・外来語	3			4.5	2.4	3	2					1	3		
	慣用句・成語・諺	0.5			1	0.5	0.5		2			4		0.5		
	特定の分野で使われる言葉		1				1.5									
	辞書に親しむ							2						1		
	上位語・下位語				0.5	0.5	0.5		1				0.5			
語源を調べる															2.5	

四教科書には、こうした叙述が見あたらない。

(二) 語の種類

単語には、単純語・合成語・複合語・派生語があることは語彙の基礎知識の一つである。最も詳しいのは学図で、各学年とも巻末単元として「言語の学習」を設定し、文字・語彙・文法の三本立てになっている、その「語句・語彙の学習」の項は、基本構成は同じであるが学年ごとに中心項目を定め詳述する形をとっている。学図一年二六五頁に



という表が掲げてあるのはわかりやすい。また、三省一年二一六頁〔ことばのしおり3〕は、設問形式にノートという説明を組み合わせて、単純語に合成語、複合語と派生語（接頭語・接尾語）の指導ができるように工夫してある。東書三年二二頁「単語の仕組み」は、例を多く挙げていてわかりやすいが、三年になってからでは遅すぎる気がする。他二社は、系統的な説明をしていない。

(三) 複合語（熟語）の構成

教出三年一〇九頁「言葉の研究室①」「語の構成」は、A 主述、B 修被修、C 述客又は補、D 似た意味で並立、E 反対の意味で並立と分類し、例を挙げ設問で定着を図っている。

三省二年二四頁「漢字1」「漢語の組み立て」は、右の五種に加えて、●同じ部分が繰り返される、●前に打ち消

しを示す部分がつく、●然化的などの補助的な意味の漢字がついた形もある、を追加している。学図二年八五頁「熟語の構成」は、二字熟語の場合として八パターン、三字熟語として五パターン、四字熟語として四パターンを、例とともに示しており完璧である。なお、光村三年一一八頁「漢語の働き」には、省略形（選管）と連続表現（列車到着時刻）の項目が加わっている。

(四) 出 自

光村一年一二二頁「語のいろいろ」は、三頁にわたって漢語・和語・外来語・混種語についての説明文と設問を載せている。他社も同様であるので、工夫のめられる点を紹介する。三省一年一三四頁では、「五和語・漢語・外来語は、後の1-3のどんな場合によく使われるか。1 日常の会話や文章 2 改まった話や文章 3 新しい感じをあたえる場合」という問いでそれぞれの特徴を理解させようとしている。東書二年二二八頁「言葉の学習 1 次の外来語を例にならって漢語に言い換えてみましょう。」(例) チャベル↓礼拝堂 アドバイス ウイークエンド エキサイト 等。」同三年一一一頁「言葉の学習 1 次の言葉を例にならって漢語に言い換えてみましょう。」(例) つかう↓使用 くらべる にげる だまる ねむる ちがい 等。」学図二年二二八頁「学習 C 1 次の傍線の部分を、和語で書き直そう。①メロスには……瞬時ためらい、②猛勢一挙に橋を破壊し。」これらは語彙を豊かにするという指導要領に即した設問でもあると思う。

(五) 類義語・対義語

各社ともに説明文で採り上げているが、一番詳しいのは学図二年二六三頁「意味よる語のグループ」で、類義の関係を(1)意味がほとんど重なるもの(来年―明年)(2)一方が他方を包み込むもの(時間―時刻)(3)多くの部分が重なり合うもの(愛―愛情)(4)意味する事柄が互いに近いもの(警報―注意報)と分類して示した後、語感の違いにも注意

する必要があるとして五つのタイプを挙げている。また対義語についても、「高い」の対義語は低い（空間について）と安い（値段について）とか、気体―液体―固体のように三つ以上の語が一组になっている場合にも触れている。次に詳しいのが東書二年二五頁で、他社は少し簡略にすぎる。

(六) 慣用句・成語

慣用句・故事成語・諺についても、各社ともに説明文、設問で採り上げている。一番詳しいのは教出二年九〇頁「慣用句のいろいろ」で、「転倒して骨が折れた」と「説得するのに骨が折れた」を例に引いて基本的な説明をした後、設問形式でいろいろな慣用句の意味や由来を調べたり、慣用句を使った短文作りをさせている。興味深いのは、「一般に慣用句は、全体として決まった形をしているので、勝手に一部を別の言葉に置きかえることはできません」として「道草を食う」を上品に言おうとして「道草を食べる」などと言えば笑われてしまいます」とか「氣にくわない」「隅に置けない」……などのように、打ち消しの形でしか使われない慣用句もあります。」という説明である。この項目については、光村のみが故事成語についての説明文（一年二〇九頁）だけで慣用句の説明文を載せていない。しかし、設問形式で一年一五九頁、二年四一頁の二箇所「影をひそめる」などの意味を考え、体にかかわる言葉の使った表現を集めるように指示して指導のきっかけは設けている。光村の教科書を使用している先生が、教出の記述のレベルまで指導できるかは、各自の意識にかかっていると言えよう。

(七) 同音（訓）異義語

この項目は、漢字学習における同音（訓）異字の使い分けと重複する面があり、設問の部は便宜上すべて文字に入れた。説明文では、学図二年二六五頁に「同音異義語」という小見出しのもとで「文化・文科・分化」などを挙げ、話す際の注意を述べているの等を表に示した。

(八) 多義語 (含意味の派生)

最もまとまった説明をしているのは三省三年一四四頁「ことばのしおり²」である。「辞書的な意味を二つ以上持っている単語を多義語といいます」と定義づけた後、「目」「近い」「柱」などを採り上げて説明したり、辞書で調べよう指示したりしている。そして、基本的な意味と派生的な意味についても述べていて大変よい説明文である。次は学図一年二五六頁の説明がよい。他はもの足りない。

(九) 上位語・下位語

教出三年二七二頁に「ある一組みの単語が、意味のうえで『含む—含まれる』という関係にある場合、前者を上位語、後者を下位語といいます。例えば『昆虫』という語と『トンボ』という語では、前者が上位語、後者が下位語にあたります。」という説明のあと、課題で理解を確認させるように配慮してある。学図・三省もほぼ同じであるが、東書・光村に記述がない。この項は、語彙を体系的に把握するためにも必要な知識であるから、すべての教科書で採り上げて欲しい。

(十) 語源

光村二年二三九頁に「1言葉を集め、その語源を調べる。」という項目を設定し、「その言葉がどういふところから生まれたかを調べ、また、現在どのように使われているかを具体的事例に即して調べよう。」という課題を提出している。そして「『わたしたちの調べた語源辞典』を作るのももしろい。」と提案している。

語源という語は、五社十五冊中ここだけに出ているにすぎない。語源については以前にも述べたごとく、生徒たちが言葉に興味を持つようにしむける最も有効な事項なのであるから、タブー視せず中学生で理解できる範囲でどしどし提起してほしいと希望しておく。

(注³)

四 文 法

指導要領には、一年で「エ文と文との接続関係」「オ指示語や接続詞」、二年で「エ文の成分、文の組立て」「オ単語の活用、助詞や助動詞の働き」、三年で「エ文章の展開」「オ敬語」といった項目が掲出してある。この記述自体は断片的であるが、第32(1)の「ある程度まとまった知識を得させる指導もできるように配慮すること」という条項に配慮したためか、五社ともに口語文法を体系的に記述している。文章論は「A表現」の作文指導と組み合わせて叙述しているものもあるが、文章―文―文節―単語と分析した上で、品詞分類を掲げ、各品詞の特質や働きを説明するという方法は各社とも同様である。記述の量的な比較は表Ⅳに掲げたが、説明文の部は、各所に「〔文法の窓〕（ことばのきまり）」として分散的に（用言の活用とか助詞の働きとかのテーマ別に）掲出しているものをページで示した。巻末に、文法事項をまとめてある部分は「巻末文法のまとめ」として一括して頁数を掲げた。

表Ⅳの設問の部が隙間だらけであることにまず気付く。学図が意欲的に各教材学習に合わせて文法事項を問い、理解を定着させていこうとする方針であるのに対し、東書と教出はほとんど文法事項の設問を掲げていない。説明文だけでは知識が上すべりになってしまわないか心配である。次に注目したいのは、三省が文末表現に力を入れている点である。一年一五八頁では、推量・伝聞・疑問・否定の表現を区別させ、二年一四一頁では、推測・婉曲・勧誘・疑問の区別をさせる設問を掲げたあと、三年五四―六四頁で「いろいろな文末表現」と題する説明文を掲げ、助動詞や終助詞の学習と有機的に結びつけた文論を学ぶように工夫してある。表現にも応用できるすばらしい企画である。

次に古典文法についてであるが、中学生にも実際に古文の文章を読ませるわけであるから、最小限の説明は必要で

表Ⅳ 文法

項目	出版 社			東 書			学 図			三 省			教 出			光 村		
	学 年			1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
設問の部 (数値は行数、カッコ内は設問数)	文と文との接続の型						15 (1)											
	文節に区切る						16 (2)											
	文節の相互関係						16 (2)	20 (2)	6 (1)		10 (1)						16 (2)	
	品詞名を答える						11 (2)		5 (1)									
	自立語・付属語の別							9 (2)										
	代名詞(含指示内容)								5 (1)	8 (1)								
	接 続 詞						5 (1)					7 (1)						
	補 助 動 詞							4 (1)										
	助・動 詞							6 (1)									18 (2)	12 (1)
	助 詞							6 (1)	17 (2)			5 (1)						
	助動詞と助詞							18 (2)										
	文 末 表 現							20 (1)	13 (1)	9 (1)	10 (1)						8 (1)	
	古文独特の言葉											3 (1)						
説明 文 の 部 (数値は行数、ベ ー ジ 数)	文章・文・文節・単語			5			5.5			4			1			5		
	文節相互の関係				1.5		4			7	11	4	2	2		4.5		
	品詞のいろいろ			3			8.3			4			2			6		
	指示語のはたらき			2			1			0.5								
	接続語のはたらき(含文接続の型)			6			4.5				10					9.5		
	副・連体・接続・感動詞									5			2				6	
	活用のある自立語				2					8.5			2			7		
	助動詞の機能				2						3.5		2			2.5	3.3	
	助詞の機能				1.5						2.5		1	4		3.5	3.3	
	敬語のはたらき					3			1			3			5		3	
	品詞の転成									0.5								
	文 末 表 現											11			7			
	言い方の使い分け											5						
	古文の表記・仮名遣い			2		2	2			1			0.7	0.6		0.5		
	古 語				2			1			2	2	0.6	0.6				
	文法と日常生活																3	
	卷末文法のまとめ			7	30	23	23	32	20		16	13	19	16	9	7	7	13
	綴じ込み活用表(頁換算)						4	4	4	4	6	6	6	6	6	4	4	4

あろう。仮名遣いが違うこと、語頭以外のハ行音をワイウエオと発音すること、活用の仕方に違いがあること、係り結びの法則があること、現代語と意味の異なる語や現代では使われなくなった古語があること、これだけは記述しておきたい。この点では、東書・教出以外はもの足りない。

敬語法は、指導要領の示すごとく各社とも三年生で掲出している。以前見られた謙讓語の説明の不適切も皆無で、各社とも妥当な記述となっている。なお、学図は頁数が少ないが、直前に「敬語」と題する金田弘氏の書き下ろしの読み物（六頁）を載せており、これは表Ⅵに入れてある。

さて、文法の記述そのものではないが、文法に関連する問題点を一つ指摘したい。

それは学図三年一九六頁の「元二の安西に使ひするを送る」という詩の結句である。書き下し文で「西のかた陽関を出づれば故人無からん」（傍線稿者）と記し、左側の口語訳では「西の方へ、陽関を越えていったなら、もう、君に友達はいないだろうから……。」となっている。口語訳のごとく仮定条件として解釈するのなら、傍線部は「出でなば」と読む方が文法に則している（詩吟の世界ならともかく、学校文法では）と思うが如何。

もう一つ、用語の問題であるが、光村二年一六二頁に「形式用言」「形式動詞」「形式形容詞」という山田文法の使用語を用いて説明しているのは如何だろうか。「（または補助用言という）」と断るくらいなら（光村の編集委員会の確乎たる統一意見ではないらしいから）、他四社と同じ橋本文法の「補助用言」に修正していただけないものであろうか。これはお願いである。

五 言語一般

表Vに挙げた項目は、音韻・文字・語彙・文法までの諸項目に入らなかった〔言語事項〕に関する記述を採り上げたものである。

話し言葉と書き言葉の違いについては、指導要領一年次に「話し言葉と書き言葉について理解すること」とあるのを受けている。三省以外は一年生で掲げている。なお、学図は宮腰賢氏の書き下し「話し言葉と書き言葉」(六頁)を載せているので表VIに入れた。記述内容は五社ともに大差はない。

共通語と方言については、指導要領二年の「カ共通語と方言の果たす役割などについて理解すること」を受けて、各社とも二年生で扱っている。この項目でも学図は大橋勝男氏の書き下ろし「方言と共通語」(六頁)を掲げ、他社は記名無しの説明文となっている。最も力を入れた記述をしているのは、教出二年一六五―八頁〔言葉の研究室②〕「方言と共通語」である。三枚の日本地図に分布図を入れ、手紙で方言調査をする手順まで記載している。反対に最もおざなりなのが三省である。地方から都会に出て来て、方言を笑われたことから無口になり性格まで暗くなってしまうという話をよく聞く。すべての日本人が生まれ育った国の訛りと共通語という二つの言語を持つていて、方言には温かさのあることをすべての(特に都会の)中学生にきちっと教え、方言を決して馬鹿にしたり笑ったりすることのないように指導したいものである。

修辭技法の関係では、まず比喩についての説明文をみる。東書三年一一三頁には、直喩(明喩)・隱喩(暗喩)について例を示して説明している。三省二年二二〇頁は「くのように」などをつけて表すものとつけなくて表すものと

表V 言語一般

項 目		出版 社			東 書			学 図			三 省			教 出			光 村		
		学 年			1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
設問の部 (数値は行数、 カッコ内は設問数)	文章構成(起・承・転・結)									6 (1)									
	文章の展開(原因→結果 etc)											20 (1)							
	文体の特徴											3 (1)						8 (1)	
	比 喩 表 現				8 (1)				6 (2)		23 (3)		20 (4)				1 (1)	6 (1)	
	擬 人 法								1 (1)										
	倒 置 法							9 (1)											
	俳句の技法															4 (1)			
	短歌の技法(含区切れ)															7 (2)			
	表現効果(強調など)										59 (7)	30 (4)	19 (2)						31 (4)
	感覚に訴える表現										7 (1)								
	省 略											12 (1)							
	対 句												2 (1)						
	二 重 否 定												6 (1)						
	「 」、一、…の働き											19 (3)							
	句読点の打ち方													2 (1)					
	陳腐な表現を指摘												8 (1)						
	片仮名表記の効果													2 (1)					
説明文の部 (数値はページ数)	話し言葉と書き言葉				3						1.5		4			2			
	共通語と方言					3					1		4				3		
	比 喩						1.5				1.5								
	和歌の句切れと修辞								2							0.7			
	漢文訓練入門					0.4			1					0.5					
	小説のことば											2							
	▲ートの書き方																2		
	コンピュータに音読させる																3		
コンピュータに読点を打たせる																		3	

があると説明している。諷喻を挙げているものはない。

和歌の区切れ(リズム)と枕詞・掛詞・対句・省略について二頁費やして説明しているのは、学図三年一九八頁である。教出三年一九八頁は「和歌の区切れとリズム」の説明のみでレトリックには触れていない。

以下に、各社の工夫ある項目を紹介する。

三省三年二二〇頁には、「小説のことば」と題する説明文があつて、「小説を読む時は、その選び抜かれたことばの一つ一つを読み味わいたいものです」と結んでいる。

光村一年七四頁は、既に音声と音韻の章で触れた「コンピュータに文章を音読させる」と題する三頁の説明文であるが、同三年六〇頁にも「コンピュータに読点を打たせる」という題の読み物を載せており、光村のコンピュータ時代を意識した意欲的な編集方針が窺える。この文章では、読点を打つ原理を分析的に述べており、表現（作文）にも役立つ。

同じく光村一年五〇頁は「学習ノート」と題する「ノートの書き方」の説明文である。広い意味で「言語事項」に関連した新しい企画と考え、採り上げた。

次に、設問の部を見ると、三省が最も意欲的である。「表現の持つ効果」の項目に入れているのは、擬声語・擬態語、強調表現、別の語句に置き換えた時の感じの違い、などである。「文章の展開」は、「次の1〜3の述べ方は、後のア・エのどれになっているか、文と文との関係に注意して確かめよう。」という問いで、二文ずつ一組になったものが三組示され（ア原因・理由から結果へ イ結果から原因・理由へ ウ抽象から具体へ エ具体から抽象へ）の中から選び、文と文との関係ひいては文章の展開を把握させる設問である。

文章構成に関しては、学図三年二一四頁の「『ある心理学者の書いた……同じである。』の文章は、起・承・転・結の構成になっている。どこまでが起であり、どこからどこまでが転であるかを考えよう。」という設問が良い。

教出一年二二七頁「『おーい、ツノダァー。』の片仮名表記の効果について話し合ってみよう。」光村三年八一頁「次の表現を比べて、意味の違いを話し合ってみよう。」〔●あの研究室に立ち寄りたいと考える。●あの研究室を訪ねたいと考える〕といった設問が注目される。

さて、昭和六十年版教科書の調査の時、「楽しく言葉を学ばせる配慮が窺える」として高く評価した三省の「言葉遊び的読み物」が姿を消したのはまことに残念である。一年で「数え歌・しりとり」、二年で「早口ことば・ごろ合

わせ」、三年で「回文・ダブレット」という各四頁の楽しい読み物であった。こうした試みは、中学の先生方に歓迎されなかったであろうか。他社の教科書にも拡大することを願っていた稿者の期待とは逆の結果となった。

世界の言語と比べながら日本語の特色を述べる六頁の読み物（教出）も良い読み物だと思ったのに、再録されず代わりの文章も掲載されていない。

国語学の立場から、言語教育として望ましいと思う教材や記述と、現場の先生や生徒の好み・希望との間に、ギャップがあるのだろうか。現場の声を大切にしながら教科書を編集するのは当然であるが、迎合しない確固とした編集理念も必要だと思う。単に目先を変えて新しみをだそうとして改変したのなら、流行のみを追って不易を捨てたと批判されよう。いずれにせよ、その杜らしさ・特色は新版でも受け継ぎ持ち続けるべきだと思う。その意味から言うとうらしさを失うほどに大きく変貌したのは、三省と教出である。学図が一番学図らしさを保っているように思われる。

むすび

表Ⅵに、言語に関する読み物教材を挙げた。以前だと、金田一春彦先生、大野晋氏、外山滋比古氏、鈴木孝夫氏、といった言語学・国語学の大家の文章が掲載され、生徒が日本語のいろいろな特質を知ると同時に、言葉に関心を持つように配慮した編集になっていたように思う。ところが、今回調査対象とした五社のうち、光村だけは各学年に国語学者や詩人の言葉に関する文章が配されていて評価できるものの、他社は全く不十分だと言わざるを得ない。すなわち、表Ⅰ～Ⅴの説明文と同質の文章が多いことと、全学年に亘っていないからである。そんな中で一ノ瀬氏清水氏の文章で構成した「ことばと文化」という単元を三年に置いた三省堂の姿勢は高く評価したい。願わくは、このよう

表Ⅶ 言語に関する読み物教材（左は学年、右はページ数）

標 語	著 者 名	東 書	学 図	三 省	教 出	光 村
話し方はどうかな	川上 裕之	1 6				
書いたものを発表する(朗読)	編集委員会	1 3				
意見を述べる(話し合いのルール)	編集委員会	2 12				
「日本語」ってなんだろう	林 巨樹	2 7				
話し言葉と書き言葉	宮腰 賢		1 6			
自分の考えを伝えるとき	川崎 洋		2 8			
方言と共通語	大橋 勝男		2 6			
言葉の世界 劇の言葉	編集委員会		2 10			
討論—考えを深めあう—	編集委員会		3 5			
敬 語	金田 弘		3 6			
「ありがとう」と言わない重さ	一ノ瀬 恵			3 11		
手あかのついた言いまわし	清水 義範			3 11		
心のメッセージ	甲斐 睦朗					1 8
言葉の特性を生かして	谷川俊太郎 ^他					1 6
「開いた社会」に向けて	樺島 忠夫					2 6
身の回りにある言葉を	稲垣 吉彦 ^他					2 4
言葉の力	大岡 信					2 3
なつかしいと恋しい	渡辺 実					3 5

な単元が一・二年にも設定されていたらと残念に思う。特に教出は言語に関する読み物教材が一編も掲載されていない。説明文だけで、知識として漢字や語彙や文法を教えれば事足れりと考えているのだろうか。

表Ⅶに、付録として掲載されているものの中から、文学史に関する記述や年表、読書案内を除いて、「言語事項」関連のみを一覧表とした。漢字表として一括したが、社によって小学校の学年別漢字配当表（一〇〇六字）を別掲にしたり、一年生の新出漢字、小学校で学ばなかった音訓一覧などそれぞれ工夫を凝らしている。「漢文に関する資料」の項目に入れたのは、三省二年付録六頁「漢文の読み方」と題する説明文で訓読の基礎が述べてある。同三年付録六頁は「漢詩について」という題で、漢詩の分類とそれぞれの特徴を例を挙げて説明している。（表Ⅴへ入れた方がよいが付録としてあるのでこのように扱った）あとは項目で理解いただけると思う。

以上、各項目にわたって調査した結果、果たして国

表Ⅶ 付録（言語事項関連のみ）

	項 目	出 版 社			東 書			学 園			三 省			教 出			光 村		
		学	年		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
表 と 説 明 文	漢 字 表				20	20	20	17	16	16	23	23	23	19	15	15	13	9	12
	漢文に関する資料											1	2						
	原稿用紙の使い方						1.5	3			2								
	推敲(校正)の記号							1											
	文集作り											3					2		
	辞典の使い方							1		2									
	部首のいろいろ							1											
	楷書と行書								1										
	俳句の季語									1									

語の教科書は進歩しているのか、と自問した場合、素直にYESと言えないのである。音声・朗読の面では少し進歩が見られるものの、他の面で以前の良さが消えてしまったりして、総合的には十一ゼロと言った評価しかできないからである。

ともあれ、ここ三年程はこの教科書で中学校の国語科教育は行われる。現場の先生方の声が多く出版社に寄せられ、次回の改訂でぐんと良くなることを期待するものである。

（平成五年九月三十日稿）

（注）

- 1 拙稿「中学校国語教科書における〔言語事項〕に関する記述の問題点（椋山國文學）第十号、昭和六十一年三月）
- 2 表1には、あえて各教科書に全く採り上げていない項目をも掲げておいた。これは、将来取り入れて欲しいと稿者が願っている項目である。（以下の表も同じ）
- 3 1に同じ